

パーリ註釈文献における sacca の分類

——『解脱道論』との比較——

林 隆 嗣

1. はじめに

ものごとの真実のありさまを探求し、実践的にそれを体得することを目指した古代インドの出家修行者やバラモンたちは、時を超えて在り続ける真の実在 satya (Pāli sacca) をめぐって考察と議論を重ねてきた(後藤2002参照)。仏教における satya は教理化が進むと四聖諦や二諦説の概念に固定されていくが、パーリ經典を見渡すと多様な文脈でこの語が用いられていることがわかる¹⁾。上座部が伝承した經典での sacca の用例が分類整理されるのは、紀元5世紀のブッダゴーサが著した『清浄道論』(Visuddhimagga, 以下 Vism) やその他のパーリ註釈文献においてである。また、Vism に先行する『解脱道論』(Vimuttimagga, 以下 Vim) でも sacca の分類がなされ、それぞれの用例が示されているが、従来の現代語訳などではそれらの典拠が特定されたことがなく、この分類に注意が向けられることもなかった。本稿では、これらの文献が定めた sacca の分類内容を明らかにしつつ、聖典解釈における活用状況を視野に入れてこの分類の意義とパーリ註釈文献の作法について考えてみたい。

2. 『清浄道論』と『解脱道論』における sacca の分類

Vism 496–497 (=Vibh-a 86, Paṭi-s I.63–64) では、「〔聖典からの〕意味の抽出」(atthuddhāra) の観点から、聖典で用いられる sacca を5種に分類する。

- ①「事実を語るべし、怒るべからず」(Dhp 224) などの場合は vācāsacca 「の意味」で「通用している」。
- ②「沙門バラモンは真実(不妄語戒)に留まっている」(Ja V.491) などの場合は virāṭisacca 「の意味」で。
- ③「善であると称する議論者たちはどうして真理を種々様々に説くのか」(Sn 885) などの場合は diṭṭhisacca 「の意味」で。
- ④「真実の一つであって、二つとない」(Sn 884) などの場合は他ならぬ涅槃でありそして道である paramatthasacca 「の意味」で。
- ⑤「四聖諦のうちのどれが善か」(Paṭi II.108, Vibh 112) などの場合は ariyasacca

〔の意味〕で。

ここで分類された個々の sacca の意味は、具体例として引用された経文と分類概念から理解することができる。つまり、① *vācāsacca* (言葉上の事実) は、言説内容に誤認や虚偽がなく、言葉が事実を言い表していること、② *viratisacca* (〔妄語から〕慎み離れることとしての真実) は、戒の受持によって嘘を話すことを心理的に忌避して真実を保っている状態、③ *diṭṭhisacca* (〔誤った〕見解である「真理」、または「真理」に比せられる〔誤った〕見解) は、仏教外の沙門やバラモンがそれぞれの偏見を勝手に「真理」と称しているだけのもの、④ *paramatthasacca* (最高の目的としての真実) は、涅槃と道を指す究極の真実、⑤ *ariyasacca* (聖者たちの真実) は、「四聖諦」で説かれる、苦・集をも含む四種の真実である。

このように経典の用例から sacca を分類して個別に名称を与える手法は、Vism 以前のパーリ文献には見られないが、同じ議論構成を有する Vim においてすでに行われていることから、ブッダゴーサの独創でないことは疑いの余地がない。

Vim (T no. 648, vol. 32, 453a4-9) では「分別」という項目で①語諦、②各各諦、③第一義諦、④聖諦という4種類が挙げられている。Vism などの記述と照らし合わせると、それぞれに付随する文や語句は用語の定義説明文ではなく、基本的には経典の引用とみなすべきである。これらをより正確に理解するために、チベット訳『有為無為決択』(*Saṃskṛtāsaṃskṛtaviniścaya*) の対応箇所 (D no. 3897, Ha 193b1-2; P no. 5865, vol. 146 Ño 110a6-b1) を照合しながら典拠とされる経典の特定を試み、sacca の意味内容を考察したい。

まず、①語諦の原語は、Vism と同じ *vācāsacca* である。これに付随する「説實語非不實」は、Sn 450d の *saccaṃ bhaṇe nālikaṃ* や AN II.176, 177 の *saccam āha, no musā* にも類似しているが、チベット訳の *bden pa kho na smra zhing mi bden pa ni ma yin no* (事実だけを話して不実でない) と比べると、Sn p. 78 の *saccañ ñeva bhāsati no alikaṃ* に最も一致する。これは Vism の *vācāsacca* の典拠とは異なる。

②各各諦の「於各各諦大入諸見」は、Sn 824d の *paccekasaccesu puthū niviṭṭhā* と対応するが、チベット訳では *lta bar song ba ni so sor bden pa'o* (〔誤った〕見解に至ったもの²⁾ が各自の真理である) とある。*paccekasacca*³⁾ は、他にも聖典での用例があり (*puthu-paccekasaccāni*, DN III.270, AN II.41, V.31)、特に、仏教で無解答(無記)とすべき十の主題(世界の永続性など)に対する断定的主張を指す。そのため、他のバラモンや沙門が勝手に「真理」と主張するが、仏教からは誤った見解とみなされる

ものが各各諦であり、Vism の diṭṭhisacca に相当する。

③第一義諦は Vism の paramatthasacca と同じだが、典拠が異なる。「彼諦比丘妄語愚癡法。彼不妄語愚癡法。是諦。泥洹者是第一義諦」という漢文は、「彼の諦の比丘は妄語愚癡法なり。彼れは不妄語愚癡法なり。是れ諦なり。泥洹は是れ第一義諦なり」(干渴訳 p. 243, 浪花訳 p. 282) と書き下されるが、全体的に意味が通らない。しかし、チベット訳では *de ni dge slong gang brdzun dang rmongs pa'i chos de dag ni mi bden pa'o // gang rmongs pa med pa'i chos de ni mya ngan las 'das pa* (それは、比丘よ、つまり虚偽と愚かな法、それらは不真実である。およそ愚かでない法、それは涅槃である) とある。パーリ三蔵のうち、『中部經典』「界分別經」(*Majjhimanikāya, Dhātuvibhaṅgasutta*) には、「つまり、比丘よ、およそ虚妄を本質(法)とするもの、それは虚偽であり、虚妄でないことを本質とする涅槃、それは真実である」(*taṃ hi bhikkhu musā yaṃ mosadhammaṃ, taṃ saccaṃ yaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ, MN III.245*) という一文があり、これと対応する (Cf. 『中阿含』 T no. 162, vol. 1, 692a14 「真諦者謂如法也。妄言者謂虚妄法」)。Vim での典拠も同様であって、上記の漢文を書き下すなら、文中第二字の「諦」を除き、「彼れは、比丘、妄語にして愚癡法なり。彼れ妄語愚癡法にあらざる、是れ諦にして泥洹なり」、あるいはパーリ文に合わせるなら、「比丘よ、愚癡法は、彼れ妄語なり。不愚癡法たる泥洹は、是れ諦なり」と読むべきだろう。

④聖諦は、Vism と同じく四聖諦を指す ariyasacca に相当するが、典拠とする「是聖人所修行」(チベット訳では *'phags pa rnam kyī bsgom par bya ba yin pas*) は、Vism とは異なり、パーリ三蔵に一致する文が見当たらない。

以上、sacca の分類を比べると、Vim に viratisacca が分類概念として設定されていない点に気づかされる。おそらく、Vim の用例から推測できるように、事実を語るという意味での vācāsacca (語諦) には、もともと嘘がないこと (非不實)、つまり妄語からの遠離 (不妄語戒) も含まれていたのであろう。しかし、教理に照らせば、発話行為 (語業) は意思 (cetanā) であり、virati とは心所法のカテゴリが異なる。アビダンマの法体系は註釈時代に議論が活発になり整備が進められたことから、それに伴って二つに区別する解釈が主流になっていったのではないかと思われる。また、Vim での pacceka-の代わりに Vism では心所法の用語である diṭṭhi-が採用されている。聖典に用いられた paccekasacca に対しても、パーリ註釈 (Mp III.80=MNd-a I.88) は diṭṭhisacca と言い換えていることから、次第にダンマのカテゴリを意識した用語が好まれるようになったのではないだろうか。

3. パーリ註釈文献における sacca の分類

パーリ註釈文献には Vism とは異なる sacca の分類が存在する。まず、『相应部』(Saṃyuttanikāya) と『経集』(Suttanipāta) にある saccam have sādutaram rasānam (真実は味の中でいっそう美味である) (SN I.214, I.23=Sn 182c) に対して、註釈 Spk I.328–329 と Sn-a I.232 は、① vācāsacca, ② viratisacca, ③ diṭṭhisacca, ④ brāhmaṇasacca (バラモンの真実), ⑤ paramatthasacca, ⑥ ariyasacca の6種類の sacca を挙げる。このうち、④以外は分類概念も引用文も Vism と同じである。④は『増支部』(Aṅguttaranikāya) の「比丘／遍歴修行者たちよ、これら4つのバラモンの真実どもは〔私によって自ら理解され目の当たりにされ広く知らされている〕」(AN II.176) という一節を根拠にしたものだが、この項目は他のどの分類にも見られない。引用されているこの経⁴⁾では、遍歴修行者たちが「バラモンの真実」として伝えている言説(「あらゆる生き物を殺してはならない」や、「あらゆる愛欲は無常で苦であり、変異を本質とする」など)を、釈尊が評価する。つまり、③と対称的に、仏教外のバラモンが説く「真実」が仏教から見ても正しい教えの場合である。ところが、以下に示すように、この AN に対するパーリ註釈(Mp III.161–162)では、異なる解釈が示される。

「そこには真実があるという、まさにそのことを理解して」(yad eva tattha saccam tad abhiññāya) とは、そこ「つまり」「あらゆる生き物どもを殺してはならない」という実践道には真実があり、その通りのこと(tatha)があり、倒錯がない。これによって、vacīsacca を内に含めたうえで(内に取り込んで) paramatthasacca である涅槃を示す。

つまり、この解釈によると、釈尊は、バラモンの言説が事実(真実)を伝えていると認めて、それを仏教のものとして吸収し、仏教の究極の真実(=涅槃)として説いているのである。そのため、Mp はここで独立の分類項目を設定しない。

上記の Spk と Sn-a は、いずれも真偽はともかくブッダゴーサの著作として伝えられ、しかも文献内で Vism に何度も言及している(森1984, p. 100参照)にも関わらず、Vism の分類に触れず、独自の分類を提示しているのは一見不合理に見える。さらに、Spk に続いて制作されたとされる Mp において、Spk による解釈を無視して別解釈を提示することも不可解かもしれない。ただし、ブッダゴーサの註釈にはこうした解釈の不一致は他にも散見される。おそらく、独立論書の Vism とは違って、個々の註釈書においては原則的にブッダゴーサはスリランカで伝承された聖典直結の古註釈(シーハラ・アッタカター)を底本として他の古資

料や長老たちの個別見解などを参照しながら編纂し、その際、聖典解釈や思想に関して文献相互の厳密な整合性を追求しなかったためであると考えられる。

次に、『法句』（*Dhammapada*）にある *saccānaṃ caturo padā*（真理どものうちで四句をもつものが「最もすぐれている」）（Dhp 273b）に関連して、註釈の Dhp-a 403 は① *vacīsacca*, ② *sammutisacca*, ③ *diṭṭhisacca*, ④ *paramatthasacca* という4種類の *sacca* を挙げる。このうち、①の典拠（Dhp 224）は *Vism* や他のパーリ註釈などと同一だが、*viratisacca* を含まないのは、古い分類法と思われる *Vim* と同じ立場にある。③と④の根拠となる引用箇所に関しても Dhp-a だけが独特である。まず、③では *idam eva saccaṃ, mogham aññaṃ*（これだけが真理であり、他は虚妄である）という一節が挙げられている。これはニカーヤの様々な文脈、特に仏教で無解答とすべき主題に対する断定的主張などで用いられ⁵⁾、基本的に仏教外のバラモンや沙門が「真理」とみなす見解という意味に変わりはない。一方、ここには *ariyasacca* が設けられていないが、④ *paramatthasacca* では *dukkhaṃ ariyasaccaṃ ti-ātibhedam*（「苦という聖者の真実は」）（DN II.90, etc.）云々という〔四つの〕区分があるものと述べる。つまり、ここでは滅（涅槃）・道だけでなく苦・集を含む四諦全体を指すことになり、そのまま *ariyasacca* と重なる。このような解釈は独特で、ここにしか見られない② *sammutisacca*（世俗諦）という特殊な項目と対をなしている。②は①と重なるが、誰々が「バラモンだ」、「クシャトリヤだ」という言辞で表される内容は世間一般で通用している事実を過ぎず、究極的には実法として存在しないという点を意識した④の対概念である。その根拠となる *sacca brāhmaṇo sacco khattiyo*（バラモンは事実であり、クシャトリヤは事実である）という文は三蔵に存在しないため、この項目をあえて付加するための創作かもしれない。

sacca を世俗と勝義に分けて議論するのは、上座部では聖典アビダンマの『論事』（*Kathāvatthu*）（Kv 311）に見られるが、上座部では二諦説の議論は発展しなかった（但し、*Vim* 453a-b, *Vism* 516参照）。一方、説一切有部では、『阿毘達磨大毘婆沙論』（T no. 1545, vol. 27, 399b-c）が、Sn 884（Cf. *Vism* ④）に対応する偈文を引用して、一つの真実を四諦と関係づける種々の解釈を紹介しており、続いて四諦と二諦の対応関係についても複数の解釈を挙げている（福原1965, pp. 360-364参照）。*sacca* の分類をめぐるこのような論点を視野に入れると、パーリ經典に用例のない②世俗諦を加え、④勝義諦に四諦を含めるという Dhp-a の異例な分類法には、二諦説が盛んに議論されていた時代の解釈が反映されているのではないかと思わせる。

4. 聖典解釈への適用

本稿で検討した sacca の分類にはそれぞれ聖典の引用が見られたが、奇妙なことに、それら引用元に対するパーリ註釈で分類概念やその内容を意識した解釈はほとんど見られない⁶⁾。その一方で、Vism の② viratisacca で引用された sacce 𑖦𑖩𑖫𑖫 (Ja V.491) に対して註釈が viratisacca-vacīsacce 𑖦𑖩𑖫𑖫 と言い換えている (この2つを合わせる解釈は Cp-a 271 も同様)。ここでは、註釈者は sacca の分類概念を知っていて、しかも2つの意味を重ねている。上に引用した Mp III.161-162 では「vacīsacca を含んだ paramatthasacca」と言い、また、「paramatthasacca の側にある vacīsacca」(Dhp-a I.82=Th-a III.88) という表現もあるように、実際の聖典解釈ではしばしば sacca の意味範囲が分類区分を越えて広がる。また、阿羅漢果を得るための4つの立脚地 (adhiṭṭhāna) の1つである saccādhīṭṭhāna は Vim ③ 第一義諦の根拠になっていたが、Sv III.1022-1023 は vacīsacca または「vacīsacca に始まる paramatthasacca である涅槃」と解釈し⁷⁾、Ps V.52 では「paramatthasacca である涅槃を目の当たりにするために、まず最初に vacīsacca を守るべき」としている (Cf. Ps V.59)。さらに、saccānulomikañña (= 観察智) を解説する際に、「vacīsacca に沿っていて paramatthasacca に反していない」(Sv III.984) という説明もある。このように、vācāsacca と paramatthasacca は近接している。そして、1つの sacca の語に vācā- と virati- と paramattha- という3つの分類概念を含ませる場合もある (Spk I.329=Sn-a I.232, Sv-pt III.312)。こうした聖典解釈への適用を眺めると、註釈者たちは聖典で用いられる sacca から意味を分類しながらも、それらを各1対1対応の排他的な区分けとはみなさず、聖典で用いられる sacca の語には重層的段階的に複数の意味が込められていることを理解していたといえる。

さらに、上記の分類に存在しない nāṇasacca という概念が diṭṭhisacca と対比的に用いられ (Sn-a I.148), vācāsacca などと併記されている例がある (Sn-a II.567=MNd-a II.432)。加えて、「真実波羅蜜は vacī-viratisacca の側面では戒波羅蜜の一部である一方で、nāṇasacca の側面では智慧波羅蜜に含まれる」(Cp-a 321-322) や、「sacca とは他ならぬ vacīsacca であり、かつ viratisacca である。あるいはまた、他ならぬ nāṇasacca であり、かつ paramatthasacca である」(Ud-a 77) といった解説でも nāṇasacca が明確に分類概念化している。

経典に見られる sacca を種別する試みは、パーリ註釈文献の源泉資料となるスリランカの古註釈が著される頃から行われ、さらにこれらの分類概念は聖典解釈に

も活用された。しかし、それらは便宜的で暫定的な分類であって、すべてを網羅することを目指したものではなかった。また、この分類は思想的な観点を含むものの、アビダンマの教理の根幹に関わるものではない。パーリ註釈文献が古註釈の影響下にあることに加えて、おそらくこのような事情もあり、ブッダゴーサや大寺派教団によって Vism を規範とした分類解釈の統制がなされなかったのであろう。

- 1) ニカーヤでは、事実や真実に関連して bhūta, taccha, tatha, avitatha, anaññatha の5種の類語 (DN III.273, etc.) や, bhūta, taccha, anaññatha の3種の類語 (MN II.17) の列挙が見られる (Cf. Mil 184, Nett 4, Peṭ 259)。四諦の説明にも用いられる類語は tatha, avitatha, anaññatha の3種類 (SN V.430f., Paṭi II.104f., cf. SN II.26) で, Vism 495, Vibh-a 85, Paṭi-a 63 に継承される (但し taccha-aviparīta/avipallāsa-bhūta の3種もある)。2) 原語は diṭṭhigata と考えられる。興味深いことに, Sn 824 の註釈でも誤った見解に陥った者 (diṭṭhigata) の説と解説している。また, この偈を含む Paṣūrasutta の最後の偈 (Sn 834b) でもこの語が用いられている。3) Bapat 1937, p. 110 が漢訳語から paccekasacca を正しく想定している。『四諦論』 (T1647, vol. 32, 376a) では, 「佐多柯経」を参照し, 四諦を説く理由の一つとして「(各自執著) 諸別異諦」を破ることを挙げるが, おそらく原語は同じだろう。4) 対応する漢訳経典については, 『雜阿含』 T no. 99 [972], vol. 2, 251a–b, 『別訳雜阿含』 T no. 100 [206], vol. 2, 450c, 『増一阿含』 T no. 125, vol. 2.639a 参照 (Cf. 『阿毘達磨大毘婆沙論』 T no. 1545, vol. 27, 400b)。5) 無記に関連する主題に対する見解でのフレーズは, DN I.187f., III.135ff., MN I.484f., II.233ff., AN VI.185, 193, etc., Ud 67f., Dhs 202 に見られる。その他, DN II.282, MN I.410f., 498f., II.169, AN I.76 など参照。6) Vim ②の典拠に対する Mp III.80=MNd-a I.88 (diṭṭhisacca) と Vim ③の典拠に対する Ps V.59 (paramatthasaccaṃ nibbānaṃ) 参照。しかし, Dh-a III.314–317 (on ① Dh-p 224) でも, Sn-a II.555 (on ③ Sn 885) でも言及なし。Sn-a II.555 (on ④ Sn 884) では, ekaṃ saccaṃ nirodho maggo vā と註釈され, 内容に矛盾はないが, paramatthasacca の概念は使われない。Paṭi-a III.596 (on ⑤ Paṭi II.108) でも Vibh-a 124 (on Vibh 112) でも何も言わない。7) ここでは, 引き続いてスリランカ人長老と考えられる Mūsikābhayaṭṭhara の解釈 (sacca-adhiṭṭhāna のみが paramatthasacca で, 残り阿羅漢果としての智慧) が紹介されている。この長老は, DPPN にも森 1984 にも記載されていないので, 付加すべき人物である。

〈使用テキストと略号〉

パーリ文献は PTS 版を使用し, 略号は *A Critical Pāli Dictionary* に従う。

〈参考文献〉

Bapat, P. V. 1937 *Vimuttimaggā and Visuddhimaggā: A Comparative Study*. Poona: Published by author. 後藤敏文 2002 「サッティヤ satyā- (古インドアーリヤ語「實在」) とウースィア oṽoīa (古ギリシア語「実体」)——インドの辿った道と辿らなかった道と——」『古典学の再構築ニューズレター』9: 26–40. 福原亮蔵 1965 『有部阿毘達磨論書の発達』永田文昌堂. 森祖道 1984 『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房佛書林.

〈キーワード〉 アッタカター, ブッダゴーサ, 『清浄道論』, 真実, 四諦

(こども教育宝仙大学, PhD)